

中世王朝物語における人物の喩

——『あきぎり』『浅茅が露』『海人の刈藻』の場合——

倉田 実

はじめに

鎌倉時代以降の物語を、かつては「擬古物語」と呼びならわしていたが、今日では、それを「鎌倉時代物語」「室町時代物語」と分割して呼称したり、「中世王朝物語」とする造語までなされるようになっていく。この呼称の変遷は、物語研究の推移を表しているわけであり、「擬古」に含まれるアナクロ的なマイナスイメージを払拭し、それぞれの物語自体の意義を見出だそうとする発想が認められよう。これらの物語は『室町時代物語大成』（角川書店）、『鎌倉時代物語集成』（笠間書院）として叢書化され、『中世王朝物語全集』（笠間書院）が口語訳まで付されて刊行中となり、かつては作品を手を取ることにさえ困難であった状況が改善され、研究的基盤は整ってきている。

鎌倉以降の物語だけでなく、『源氏物語』以後の、いわゆる「後期物語」も、『源氏物語』の垂流であるとの評価で一蹴される傾向にあったが、この画一的で安易な評価も今日ではほぼ終息している趣である。『源氏物語』の圧倒的な影響は、十分に把握されたいうえで、「後期物語」の独自の物語世界に照明が当てられるようになっていくのである。筆者もこの驥尾に付して『狭衣物語』を論じてみた（拙著『狭衣の恋』翰林書房、一九九九年一月）。

さらに、こうした「後期物語」や「中世王朝物語」だけでなく、「散佚物語」にも新たな照明が当てられるようになっており、神野藤昭夫氏『散佚した物語世界と物語史』（若草書房、一九九八年二月）は、その最新の成果となっている。

これらの物語は、古来より併称された『源氏物語』と『狭衣物語』の影響下にあることは動かしがたく、両者の物語世界から自由であることはできないが、それを垂流として片付けるのではなく、積極的な〈引用〉として捉え直すことで再評価されるようになっていく。『源氏物語』以後の物語研究は、今新たな画期を迎えていると言っても過言ではないのであり、個々の作品の独自性、固有の主題性や表現性が指摘され、物語史の書き換えも行われようとしているのである。

この小稿では、「中世王朝物語」表現論の準備として、〈喩〉の観点からいささか登場人物のありようを整理して、表現性をたどる基礎的作業としたい。したがって、論の展開にはならないことを、あらかじめお断りしておきたい。取り上げた三作品は、アイウ順で選んだだけで他意はない。

一 登場人物の喩

先に、ここで言う〈喩〉について確認しておきたい。ここでは、次

のような発言を念頭に置いているが、通用する簡潔な見解になると思われる。

直喩・隠喩・換喩など、喩えられるものと喩えるものの関係を形態的に分類する比喩に対して、より広義な喩の発想が、昨今あついで視線を集めつつあるようである。喩とは、比喩的な関係でつながる事象相互の、その関係性をさす概念と考えられる。形態的に比喩の完成された形姿をとらない表現でも、そうした構造を認めうるものは喩のカテゴリーに含めることが可能なのである。しかも喩では、喩えられるものと喩えるものどちらかが主になり表に立ち、といった関係ではなく、両者のイメージの交響に重きがおかれる。(略)(河添房江氏「喩」『別冊国文学・王朝物語必携』学燈社、一九八七年九月)

この指摘にあるように、「形態的に比喩の完成された形姿をとらない表現」も視野にいれて整理していくことになるが、登場人物が喩の関係に置かれて指示されるケースとしては、次のような種類に分類されよう。

- 1 草花での喩
- 2 衣装での喩
- 3 天象での喩
- 4 光りでの喩
- 5 匂いでの喩
- 6 その他の喩

これらの喩の具体例を『源氏物語』(全集本に拠る)などで示せば、以下のようになる。繁煩になるので『狭衣物語』(集成本)の場合あまり例に出さなかったが、『源氏物語』ともども、中世王朝物語の表現は両作品の強い磁場にあることは動かしがたい。『源氏物語』と『狭衣物語』を軸において、喩のありようからも中世王朝物語の表現的史的位相が見通せると思われる。この点は、ここでの課題ではないが、確認だけはしておきたい。

1 「草花での喩」の例

ア なつかしうらうたげなりし有様は、女郎花の風に靡きたるより
もなよび、撫子の露に濡れたるよりもらうたく懐かしかりし容貌、
気配を思し出づるに、(河内本桐壺卷・源氏物語大成17頁に拠る)
イ 気高きよらに、さとほふ心地して、春の曙の霞の間より、
おもしろき榊桜の咲き乱れたるを見る心地す。(野分卷257頁)
ウ 八重山吹の咲き乱れたる盛りに露のかかれる夕映えぞ、ふと思
ひ出でらるる。(野分卷272頁)

草花の名が登場人物名になる「夕顔」「軒端萩」「末摘花」などは、呼称自体が喩になるが、用例として挙げたのはこれ以外の例になる。アは、河内本(別本もほぼ同じ)に見られる、桐壺帝よる亡き桐壺更衣の面影を偲ぶ様になる。桐壺更衣は、「女郎花の風に靡く」様や「撫子の露に濡れた」様よりもっと優れていたとされ、喩えられるもの(更衣)と喩えるもの(草花)がここではイコールではなく、比較級になっている。しかし、こうした用例も喩としてとりおさえられるのであり、河内本などのこの喩のあり方は中世王朝物語にも引き継がれていき、影響力は大きい。中世王朝物語が依拠した『源氏物語』の本文が何であったかの問題に連動するが、ここでは省略に従わざるを得ない。喩えられるものと喩えるものがイコールになる例がイ・ウであり、イは夕霧が垣間見た紫の上の様子、ウは同じく玉鬘である。紫の上が榊桜と、玉鬘が八重山吹と、それぞれ喩の関係にあることになる。この草花にかかわる二つの喩は、「春の曙の霞の間」「夕映え」という天象とかかわるが、主となるものは草花としてここでは理解しておきたい。

2 「衣装での喩」の例

ア 紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの御料(紫の上)、桜の細長に、艶やかなる搔練とり添

へては姫君（明石の姫君）の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にほひやかならぬに、いと濃き掻練具して夏の御方（花散里）に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対（玉鬘）に奉れたまふを、上は見ぬやうにて思しあはず。

（玉鬘巻129頁）

新造された六条院の新春にふさわしいようにあつらえられた衣裳の様子だが、紫の上が「着たまはん人の御容貌に、思ひよそへつつ奉れたまへかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」と発言しているように、それぞれの衣裳が女性たちと喩の関係にあることを表している。衣裳の場合、襲の色目などが植物名で表されるので、色彩と植物にかかわって複雑な喩の様相を提示することになる。中世王朝物語での衣裳描写は、『源氏物語』の水準に至るものは少なく、特定の人物に特定の衣裳や色目が結びついて繰り返し表現されるという例が多くなっている。衣裳での喩は縮小再生産の趣だが、人物にかかわる主要な喩であることは動かない。したがって、次章以降の整理では、単なる衣裳描写と思われる用例も挙げることにしたい。

3 「天象での喩」の例

ア 思ひあはするをりをりの月影（末摘花）などを、いとほしきものから、

イ 月影（光源氏）のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を（花散里の歌。須磨巻167頁）

ウ 仄かなりし月影（宇治姉妹）の見劣りせずは、まほならんはや。（橋姫巻146頁）

天象での場合は、月や太陽が喩となることが多く、藤壺が「輝く日の宮」とされたり、朧月夜の君が「有明の君」とされたりしているが、この例も喩の範疇に組み入れられよう、具体例として挙げたのは、月の光に照らし出された人物の姿が「月影」で表象される例であり、換喩とも隠喩とも取れよう。『源氏物語』で「月影」は23例認められる

が、以上の3例のみが人物を表象している。『狭衣物語』になると「月影」が人物の喩となる用例が飛躍的に高まるが、この点については別に論じた（拙稿「狭衣物語の灯影と月影」『論集狭衣物語（仮題）』新典社、刊行年月未定）。

4 「光りでの喩」の例

ア 白き御衣どものなよかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて、添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。（帚木巻137頁）

イ かのをかしかりつる灯影ならばいかげはせむに、思しなるも、わろき御心浅さなめりかし。（空蟬巻199頁）

ウ 灯影の乱れたりしさまは、またさやうにても見まほしく思す。（末摘花巻340頁）

3で挙げた用例は、いずれも「光での喩」になるが、この4でいう光は、天象を除いたものになる。「光る君」「光源氏」はまさに光の喩であり、「光るやう」「輝くやう」も人物の喩となり、すべての物語といても過言でないほど多用されている。これらの例はここでは割愛し、問題にしたいのは、例文のような「灯影」の類になる。これは「月影」と同じような用法になり、アは光源氏、イとウは軒端萩になる。「灯影」で人物を表象する例は、『源氏物語』では17例中に6例あり、以上の3例の他に、大君に1例（総角巻25頁）と浮舟に2例（東屋巻66、68頁）認められる。これが『狭衣物語』になると、15例中の12例が人物を指示するようになり、「月影」とともに注目される現象である。

5 「匂いでの喩」の例

ア 御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただありしなからの匂ひに、なつかしうかうばしきも、

イ 花の香も客人の御匂ひも、橘ならねど昔思ひ出でらるるつまな

（総角巻319頁）

り。

(早蕨巻347頁)

匂いは、香と草花の場合になり、人物呼称にかかわるものとして、「匂ふ兵部宮」「薫る中将」の例がある。アは亡くなった大君の髪の毛が薫に「ありしながらの匂ひ」を喚起させており、イでは花の香と薫の体香が、亡き大君を中君に喚起させている。ともに「匂ひ」が喩として機能しているのとれようし、「移り香」とされるのも人物の喩となり得ているが用例は割愛する。

6 「その他の喩」の例

右の1〜5の例が主要なものになるが、この他では、人物呼称にもなる「空蟬」や「雲居雁」、あるいは、子供を暗示する「鶴」「鶴の一声」などは動物に拠る喩である。また、身体の一部が捉えられて、その身体部分が喩となる例もある。「紅の鼻花」は末摘花であり、「狭衣物語」では、入道の宮(女二の宮)の尼削ぎの「髪の手あたり」が喩として機能していると見られる。

以上、仮にここでは「5種+その他」に分類してみたが、これらは複合的に使用されることもあり、一人の人物が二種以上の違った喩に置かれることもある。また、時を隔てて同じ喩が使用されることで、時間の経過とともに持続する人物の心情を暗示したりすることになる。こうした喩が多様に使用されて物語は展開するのであり、喩の偏りや持続のありようがそれぞれの作品の表現的な特徴となり、物語の質を規定していくことになる。

こうした登場人物の人としてのありようとかかわる喩の実際を、中世王朝物語でどうなっているかを以下に整理していきたい。ここでは、用例の収集に主眼を置き、そこからの作品論・表現論への展開は、後日に期すこと、先にお断りした通りである。

なお、登場人物その人のありようとかかわる以上のような喩の他に、例えば、恋する心情や様々な悲嘆そのものが喩でとりおさえられたり、

密通やその結果誕生した不義の子の喩となる例も多く認められる。これらの場合は、『源氏物語』よりも『狭衣物語』でより顕著になっている。源氏宮思慕が「室の八島の煙」で暗示されたり、入道の宮との二度目の逢瀬がかなえられない嘆きが「寢覚の床の枕」で表象されたり、密通が「逢坂」や「榎の戸」で回想されたりしているが(先の拙著参照)、これらの語句も喩を構成していると言えよう。こうした場合の用例は、「7 各種の喩」において必要に応じて挙げていきたい。

二 『あきざり』

本文は『中世王朝物語全集』に拠り頁数を示す。人物名は、「三条の姫君」(桐壺中宮)、「宮の大納言」(父兵部卿宮)、「宰相中将」(父左大臣)、「中納言」(父右大臣)、「梅壺女御」(母三条の姫君)、「朱雀院姫宮」で示す。以下は、前章で示した分類による用例であり、登場人物とその人物にかかわる喩を構成する本文を掲示していく。必要に応じて前後の文章も併せたが、中心部分には傍線を付した。

1 草花での喩

三条の姫君―「数ならぬ身は浮き草にたとふれど誘ふ水だに音なかならん」30頁。

梅壺女御―「撫子」78、98、99、108、114、129頁。

「忍ぶ草」97、102、107、108、123、138頁。

「ありし思ひ草の面影」97頁。

宮の大納言―「訪ねつるかひこそなけれ糸桜花の主ははかなかりけり」

(宰相中将の歌) 116頁。「糸桜結びとどめて別れにし花の主こそ面影にたて」(右大臣男、権中納言の歌) 116頁。

(注) 右の「糸桜」は、亡き「宮の大納言」邸に咲くものだが、そこに花の主としての宮の大納言を想起しており、喩としても把握できよう。

2 衣装での喩（女君のみ掲出）

三条の姫君―「紫の匂ひ、山吹の表着、梅の小桂、黄なる唐衣」83頁。
梅壺女御―「紅梅の匂ひ五つに、萌葱の二重織物の細長」124頁。
〔注〕単なる衣装描写だが、主人公性を暗示して喩的であろう。

3 天象での喩

三条の姫君―「昨夜の月影」17頁。「雲の上に光を照らす月影もうし
とて山に我ぞ入りぬる」〔宮の大納言の歌〕102頁。「いかにしてま
た逢坂の関越えて見し夜の月に影を並べん」〔宮の大納言の歌〕103
頁。

宮の大納言―「有明のなごありし月影」〔三条の姫君の把握〕46頁。「さ

し向かひたりし夜な夜なの月影」〔三条の姫君の把握〕101頁。大

納言母―「夜も更けて雲隠れぬる月影の闇路に迷ふ嘆きをぞする」

〔宮の大納言母の歌〕115頁。

〔注〕物語冒頭近くの人物紹介や垣間見から密通に至る場面では「月」
に執拗にこだわって語られており、この物語の月は重要な要素となっ
ている。物思いを誘う月、眺める月、思出の月、悲しみの月などの
機能が認められる。なお、亡き大納言を月に例える例は112、113に多
出。

4 光りでの喩

朱雀院姫宮―「浦に焚く海人の釣する篝火のほのかに見つる人ぞ恋し
き」〔中納言の歌〕132頁。

5 匂いでの喩

宮の大納言―「移り香をありし形見と思ふ身に袖さへ今は朽ち果てね
とや」〔三条の姫君の把握〕62頁。

三条の姫君―「移り香」〔宰相中将の把握〕82頁

6 その他の喩―割愛

7 各種の喩（抄出）

○密通の喩

「榎の戸」13、31、32、61頁。
「逢坂の関」103頁。

○密通と不義の子の喩

「種播きて」62、78、87、98、114頁。
「岩にも松は生ふる例」108頁。

「笛竹の憂きひとふしを形見にてこの世はながく音を絶えにける」
〔三条の姫君の遺詠〕

○物思いの喩

三条の姫君―「尾花が下の思ひ草」57頁。「物思ふ心の草」57頁。
宮の大納言―「忘れ草」77頁。「嘆きの枝の繁きさま」99頁。

「もの思ひの花のみ咲きまさりて」102頁。

宰相中将―「たつをだまきの」39頁。

「とをちの里に立つ煙」40頁。「室の八島の煙」76頁。

「胸に焚く藻の煙」58頁。

「生ける世の思ひ草」58頁。

「くちなし（山吹）に深く染めつる恋衣思へと言はで過ぐる身
と知れ」80頁。

「谷の埋もれ木」81頁。

中納言―「人やりならぬ思ひの種」119頁。

○われからの嘆きの喩
「藻に住む虫のわれから」98頁。「海人の刈藻の心づきなさ」101
頁。

三 『浅茅が露』

本文は『中世王朝物語全集』に拠り頁数を示す。人物名は、「齋宮」(常盤院姫宮)、「源中将の姫君」、「左大臣の大君(二位の中将の妻)」、「二位の中将」、「三位の中将」、「若君」(母源中将の姫君)で示す。以下は、前章と同じく用例の掲示である。

1 草花での喩

源中将の姫君―「木繁き夏山のなかに遅桜の一枝散り残りたるを見る

心地し給ふ」(二位の中将の把握) 199頁。

左大臣の大君―「たをやかに春の柳の風にうちなびきたるを見る心地

する」 208頁。

若君―「撫子」 249頁。「忍ぶ草の種」 258頁。

2 衣装での喩

左大臣の大君―「この頃の梅の立枝、心もとなきつほみの、色々にか

さなりたる着たまひて」 208頁。

3 天象での喩

齋宮―「雲居の月」 175頁。

二位と三位の中将―「月日の光」 179頁。

(注)「雲居の月」は、常盤院の讓位を暗示する例が冒頭部にある。また、「月日の光にもあたりたまはず」(238頁)で、悲しみの表現とする例もある。

4 光りでの喩

源中将の姫君―「思ひのほかなりし灯影」 254頁。

(注) 右の用例以前の、源中将の姫君が「灯影」「灯の光」で照らされ

る用例は、197、199、245頁など。

5 匂いでの喩

ナシ

6 その他の喩

源中将の姫君―「伏屋」 203、214、224頁。

「狭衣の道芝の姫君のやう」 229頁。

7 各種の喩(抄出)

○密通の喩

「飛鳥川の淀み」 190頁。

「昨夜の遣戸口」 201頁。「昨夜の遣戸」 205頁。

「飽かぬ夜床」 204頁。

「ありし夢」 217、230頁。

○妻の密通を知る苦悩の喩

「上はつれなき葦の下根」(二位の中将) 188頁。

○密通示唆の歌

「更けし夜の星の光のあやなさに月なしとてぞたち帰りぬる」 190頁。

○慰み、または、悲嘆の喩

「姨捨山の月見る心地」

「姨捨ならぬこと」 197頁。「更級、姨捨」 231頁。

○飽かぬ別れの喩

「雫に濁る」 255頁。

四 『海人の刈藻』

本文は『中世王朝物語全集』に拠り頁数を示す。人物名は、「関白」(父関白左大臣)、「殿の上」(按察殿大君)、「大将の上」(按察殿中君)、

「頭の中将」(按察殿長男)、「藏人少将」(按察殿次男)、「藤壺女御」(按察殿三の君)、「新中納言」(入道の君)、その他の、呼称に混乱をきたさない人物は適宜に示す。以下は、用例の掲示である。

1 草花での喩

大将の上の髪―「青柳の糸よりもめづらか」(夫頭の中将の把握) 61頁。

「御髪も少し色なる筋にて、尾花だち」(夫頭の中将の把握) 95頁。

藤壺女御―「撫子の露に濡れたるよりもなほうつくしうらうたく見え給ふ」(父按察殿の把握) 98頁。

「ありし花のあさばらけ」(新中納言の把握) 103頁。

新中納言―「盛りの花の散りぬる心地」187頁。

2 衣装での喩

大将の上―「紅の匂ひ十ばかり」19頁。「紅の人」21頁。「梅の小桂、

紅の細長」61頁。「紅・萌黄の御衣」86頁。

端童―「花村濃の狩衣、紅の衣」22頁。

殿の上―「梅の匂ひ十ばかりに、紅の袴、萌黄の唐衣」28頁。

江侍従―「紅、萌黄の擣ちたる限り着て、花々と仕立てられて、唐衣

も人より殊に見えて」82頁。

藤壺女御―「柳・桜の御衣」88頁。

「白き御衣どもにまつはれて」102頁。

「紅葉の錦裁ちかへて」145頁。

(注) 右の他に、被物が「紅の袴、梅襲の衣」(27頁)と示され、「女房五十人、出で立ちちは皆、紅、山吹、唐衣は萌黄なり」(162頁)とする衣装描写がある。

3 天象での喩

藤壺女御―「去年のあけぼの」(新中納言の把握) 125頁。

「雲の上に見し世の花は変はらねど月を形見の空ぞ恋しき」(新中納言の歌) 125頁。

(注) 冒頭部は、「天照る月」(11、12頁)で、内裏を指示し、「澄む月」(14、15頁)で内裏に見る月の美を言う。また、「雲居の月」(166頁)や出家前の新中納言詠「雲居にて今宵眺むる月影を深山の奥の光とぞ見ん」(181頁)も内裏の月を指示する。

4 光りでの喩

帝(朱雀院弟)―「あふひの光」31、33頁。

新中納言―「あふひの光」31頁。「あふひの影」49頁。

藤壺女御―「ありつる御灯影」137頁。

5 匂いでの喩

頭の中将―「ありつる人の移り香」93頁。

6 その他の喩

新生児(関白大君)―「雛鶴」54、55頁。「鶴の毛衣」54頁。「鶴の―

声」54頁。「雲居に通ふ鶴」55頁。

7 各種の喩(抄出)

○密通の喩

「ありし夕べ」60頁。「あさましかりつる夕べ」119頁。

「逢坂の関のあなた」94頁。

○不義の子の喩

「雲居まで生ひのほるべき若松を見ても下枝を思ひ忘るな」177頁。

「伝へてしうきねをしのべ笛竹のこの別れこそ世にたくひなき」184頁。

○物思いの喩

「いはけなき人にも思ひの枝さし添ひぬる心地する」141頁。

「涙に曇る下燃えの煙」166頁。

○枯れ木に花の喩

「枯れたる枝」142頁。「枯れ木にも花の咲くてふ寺に来て頼めしこと
のかひなからめや」143頁。

○われからの嘆きの喩

「海人の刈藻に住む虫のわれからつらき人多く嘆きわび給ふ」146頁。

(この稿続く)